

「第3回 全国子ども司書研究大会」レポート

子どもの視点で図書館・学校図書館を考える  
「子ども司書制度」の普及を目指して

子ども司書推進プロジェクト代表 高信由美子

全国の情報を共有

2015年8月1日、2日に、第3回全国子ども司書研究大会を、東京都の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催しました。第1回は2011年11月に青森県板柳町で、第2回は2012年11月に埼玉県三郷市で開催しています。

多彩な「養成講座」を報告

第1日目は『子ども司書マニュアル』の著者、東海学院大学教授兼東海第1幼稚園長 アンドリュー・デュアさんの基調講演。午後からは、4つの分科会でモデル事例の発表があり、子ども司書制度の研究が行われました。

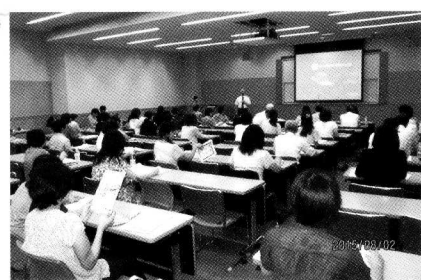
福島県矢祭町もつたいない図書館で2009年に考案された「子ども司書」は、急速に全国各地に広まり、現在では100以上の自治体や図書館など実践しています。しかし、「子ども司書養成講座」を実施するにあたり、その指導機関やテキストもなく、インターネットで先進地の情報を手したり、独自に調査・研究をし、手さぐりで開講しているのが現状です。

私が記録係を務めた第2分科会では、福島県矢祭町の「矢祭子ども司書講座」を紹介。16講座で構成され、むずかしいことでもやさしく学ぼう、そして楽しくおもしろく学んで友だちに伝えようというところが大きな特徴です。研修旅行で絵本作家を訪ねたり、県立図書館を見学もします。秋冬のジュニア俳句スクールでは、俳人協会や地域の俳句会の協力を得て、大人と一緒に吟行をします。

また、矢祭町では全国公募の手づくり絵本コンクールを毎年開催していますが、第1次審査会には子ども司書も審査員として出席し

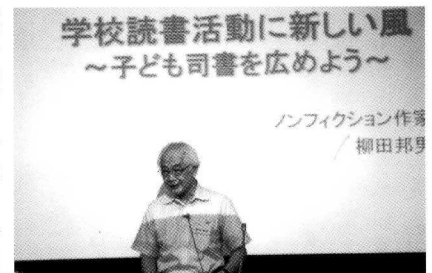
第2日目は、ノンフィクション作家 柳田邦男さんの基調講演「学校図書に新しい風・子ども司書」が行われました。子どもが読んだ本の感想を柳田さんに手紙で送ろうという、東京都荒川区立図書館の取り組みが紹介されました。第7回となる今年も、632点もの手紙が寄せられました。小学生でもこんなに深いことを感じたり、考えたりしているのかと、感動する手紙がたくさんあったそうです。子どもの視点で学校図書館を考える必要性を話されました。

地域・行政との連携を密に



アンドリュー・デュアさんの基調講演で始まった全体会

パネルディスカッション「子ども司書制度の研究」では、子ども司書講座を実施している事例として、笠岡市立図書館は「講座には、選択科目と必修科目を設けている」、世田谷区立中央図書館は「2日間の講座で子ども司書を認定している」、潮来市立図書館では「子ども司書新聞を市内全戸に配布し、子ども司書の理解を深めてもらっている」などと発表されました。今後の課題として共通しているのは、学校と地域の連携を密にしていきたいということ。子ども司書養成講座は主に図書館で行われていますが、活動の中心は学校です。図書館が単独で講座を開講しても、子どもが集まらなければ



子ども司書の魅力と可能性を語る 柳田邦男さん

講座は開けません。それには教育委員会の支援が必要であり、行政が各自自治体の行政計画で策定することが、この制度を安定させ、継続させることだと思います。子ども司書推進プロジェクトのメンバーは、全員が現役の図書館司書や教育委員会の職員です。子どもを取り巻く環境に危機感をもった人たちが手をこまねいては行けないと、静かに動きだしました。研究大会も前回までは「家読サミット」と抱き合わせでの開催でしたが、今回は、メンバーだけの自主運営でした。そのため、開催にかかる経費は「子どもゆめ基金」から支援をいただきました。今後も研究を重ね、子ども司書を通じた新しい手法で子どもの読書環境を作ってまいります。